

主 題：主の宣教師 — ピリポ

聖書箇所：使徒の働き 8章

今日、私たちが学ぼうとしているひとりの人物、ピリポ。彼は宣教師でした。神は彼を大切な宣教の働きに用いられました。しかし、私たちが見ておきたいことは、どんな働きをしたかよりも彼がどのような人物だったのかということです。彼は霊的であり、霊的リーダーの一人でした。使徒の働き6章からこのピリポがどのような人であったのかを見て、みことばの教えを見て行きましょう。私たちが先にステパノのことを学んだときにもこのことに触れましたが、12使徒には自分たちの手に負えないことが出てきたわけですが、その理由はそのときに話しました。人々の数が余りにも増えてきたため、やもめ全員の世話をすることができなくなってきました。そこで彼らは7人の人物を選んで、彼らをこの働きに任命して行くのです。その7人のうちのひとりが今日学ぼうとしているピリポです。この7人の人たちの特徴が6：3に書かれています。「そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。…」とこれが条件でした。この条件に基づいた7人の人たちが選ばれたのです。そして、前にも話したように、この7人の中でステパノとピリポ、この二人以外の人たちのことは詳しく記されていません。このピリポは、今私たちが見た三つの条件、その条件に基づいて彼は選ばれたのです。その条件を見て行きましょう。その時に、私たちはこのピリポがどのような人だったのかが分かるのです。

☆人々に選ばれた7人の人たちの特徴

1. 評判の良い人

この世にあって評判の良い人、もちろん、教会の集まりにあって、それ以外のところでもそうであったと言えます。この「評判の良い」ということばは「ほめる、証を伝える、証を広める」という意味をもったことばが使われています。人々からほめられるのに値する人です。周りの人々が彼のことをほめるのです。恐らく、彼らはどこにあって喜びをもっていたのでしょう。それは人々には不思議に見えるのです。どの時代でも喜べない辛く悲しいことは私たちの周りに溢れています。でも、クリスチャンは感謝なことの中にあって喜びを持ち続けることができるのです。「いつも喜んでいなさい」と言われましたが、そのようにできるからその命令が与えられたのです。神の助けによっていつも喜び続けて行くことができるのです。ですから、選ばれた人は当然、いつも喜んでいて人です。また、すべてのことに感謝している、そして、常にどんなことに対しても正直であったし、勤勉であったし、信頼を得ることができる人でした。この人は信頼に値する、この人に任せておけば大丈夫、この人は嘘をつかない、そういう人物だったのです。だから、人々からほめられ評判がよかったのです。

この「証を伝える」というのは、まさにこのようなクリスチャンはこの世にあってキリストのすばらしさを伝えて行くことができるのです。私たちもよく親しい者から言われました、「それでもクリスチャンか？」と、それに対して私たちは反論できませんでした。そのことばを聞いてある人はムカッとしたり反発を覚えたりするかもしれませんが、同時に、心にグサツときます。なぜなら、自分を見るからです。証を広めて行くためには私たちはこの世にあってどのように生きるかということが大切です。置かれている職場にあって、学校にあって、家庭にあって、それがどこであっても私たちはその中で、救い主なるこのキリストのすばらしさを十分に証しているかどうか問われます。ピリポはそのような人物でした。だから、評判がよかったのです。人々は彼のことをほめたのです。ピリポは明らかにこの救い主なる主イエスのすばらしさを、彼の日々の生活を通して、置かれているそのところどころにあって証をしていた、そのような人であったことを私たちはこのみことばを通して知ることができます。

2. 聖霊に満たされていた人

二つ目の特徴は3節にある通り「聖霊に満たされていた人」でした。「聖霊に満たされなさい」と私たちはよく聞きます。それを言い換えると、神のみこころに完全に従っている人のことです。勘違いしないでください。すべての点で完璧に罪を犯さない人はいません。しかし、少なくとも、霊的な人は失敗するとすぐに神の前に告白し、悔い改めて正しく歩んで行こうとする人です。なぜなら、その人の願いは神のみこころを行ない続けて行きたい、どんなときにも神のみこころに従い続けて行きたいということだからです。この教会は主のもので、ですから、教会の責任はこの建物のことではありません。教会に属しているあなたの責任は神のみこころに従って行くことです。別の言い方をすれば、みことばが教えていることはいったい何なのか、聖書が教えていることは何なのか、何が神の前に正しいことなのか、何が神を喜ばせることなのかを考えて、判断して、選択することができる人です。いつも考えな

ければいけないのです。なぜなら、私たちは多くのことを選択しているからです。知らず知らずのうち
に選択をしています。その選択を間違えると、神は私たちに警鐘を鳴らしてくださるのです。どのように？
私たちから喜びがなくなって行きます。感謝がなくなって行きます。私たちに喜びや感謝があるという
ことは私たちが正しく歩んでいるからです。神が教えていること、神が喜ばれることは何かを考え判断
できるのです。「この世と調子を合わせてはいけません。」とパウロが言ったことを覚えておられますか？「**い
や、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきま
え知るために、心の一新によって自分を変えなさい。**」（ローマ12：2）と、このみことばをよく考えて見て
ください。「**神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきま
え知るために、心の一新によって自分を変えなさい。**」と、つまり、神が私たちに望んでいることは、何が神
の前に良いことなのか、何が神に受け入れられることなのか、何がいったい神の前に完全であるかを私
たちがしっかりわきまえるように、しっかり考えて選択するように、それがみこころに従って歩むとい
うことだとパウロは教えているのです。

また、パウロはこのように言っています。「**ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、
よく悟りなさい。**」（エペソ5：17）。ですから、パウロが兄弟姉妹に、また、私たちにも語りかけて
いること、教えていることは、どういう状況にあってもしっかりとみこころは何なのかを考えて、その
ことを選択して行くことです。それができている人が聖霊に満たされて歩んでいる人なのです。聖霊に
満たされているかどうかは見えません。もちろん、聖霊に満たされている人にはいくつかの特徴があり
ます。喜びに溢れている人、感謝に溢れている人、主に対して従順に歩もうとしている人です。このよ
うな特徴はパウロによってエペソ書にもコロサイ書にも記されています。ですから、私たちは確かにそ
のようなことを目指して行くのですが、私たちに必要なことはいつもそのように考えて選択することが
求められているのです。そのために私たちには聖書のみことばが与えられているのです。みこころは何
となく漠然としてよく分からないと言っても、聖書を見るなら、これがみこころだと書いてあります。
テサロニケのクリスチャンたちにパウロが教えたことを覚えておられますか？パウロは神のみこころは
こういうことだと明確に教えています。Iテサロニケ4：3「**神のみこころは、あなたがたが聖くなること
です。**」と。きよく歩み続けることがみこころに従った歩みなのです。

また、神のみこころを考えると、神を愛し隣人を愛することがみこころであることは明らかです。
ある一人の人がイエスに質問をします、「先生、律法の中で大切な戒めはどれですか」と。そのときに
イエスがお答えになったことは「『**心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せ
よ。**』」でした。これはマタイ22：37のことばを引用していますが、これが大切な第一の戒めだとイ
エスははっきり言われたのです。これが神が私たちに命じておられることであり、神が望んでおられる
ことです。だから、みこころはこのように記されているのです。神を愛することが神に喜ばれることで
あり、同時に、「『**あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。**』」と、これが第二の戒めであるとはっきり
記されています。神が何を望んでおられるのか、神のみこころは何？と聞かれたとき、私たちは少な
くとも、このような聖書が教えているみこころをもって答えることができるのです。見て来たように、
不品行を避けてきよくあること、神を愛し隣人を自分と同じように愛すること、これがみこころなの
です。もう一歩進んで、神を愛することは神の命令を守ることだと教えています、Iヨハネ5：3「**神を愛
するとは、神の命令を守ることです。**」。ですから、このようにみことばを見ると、神が何を望んでおら
れるのが明らかに見えます。私たちはみことばを通して神が何を望んでおられるのか、そのことをし
っかり見ることです。

ピリポという人を見たとき、彼は御霊に満たされた人だった、なぜなら、それは彼自身がこの後どの
ようなことをしていったのか、それを見ることによって分かるのです。使徒の働き8章を見てください。
ステパノが殺されたとき、「**エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤ
とサマリヤの諸地方に散らされた。**」と8：1に記されています。この迫害から人々は神によって地方へと
送り出されて行くのです。神の預言の成就です。4節には「**他方、散らされた人たちは、みことばを宣べな
がら、巡り歩いた。**」とあります。

ピリポの働き

1) **出て行った**＝5節にはピリポのことが書かれています。「**ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々に
キリストを宣べ伝えた。**」。彼は福音宣教を始めて行くのです。このことを見ても彼が神に従順であつた
ことが分かります。なぜなら、これが私たちに与えられている大命令と言われているものだからです。
イエス・キリストが私たちイエス・キリストを信じる者一人ひとりに与えてくださっている大命令は、
私たちが人々を弟子とすることです。そのために私たちはこのキリストの福音のメッセージを伝えなけ
ればいけません。ですから、このピリポはまず行動を起こすのです。彼は出て行って証をするのです。
私たちが考えなければいけないこと、どうぞ、神さま、私のところにだれかを送ってください、そうす

れば私は伝道できるから、もちろん、神は私たちのところにいろいろな人を送ってくださるでしょう、しかし、私たちが神から望まれていることは「出て行く」ということです。出て行って伝えなさいと言われる。神はここで迫害を用いられました。迫害によって皆はエルサレムから出て行きました。そして、彼らはキリストを伝えたのです。私たちに必要なことは出て行くことです。先ほど賛美したように、私たちはどこにでも出て行きます、そして、あなたが語るようにと言われたメッセージを語ります。私たちは賛美したとおりそのようにします。いつだったか、何度か聞いたことの中に今でも残っているものがあります。それは「あなたがだれかにイエスさまのことを伝えたのはいつが最後でしたか?」と。日曜学校のこと、礼拝のことではありません。個人として誰かにイエスのことを伝えたのはいつが最後だったかと…。もう何十年前に聞いたことですが、それを聞いたとき考えたことは、自分はいつイエスのことを話したかな…でした。神を愛することは神の命令に従うことだと見てきました。ここに命令があるのです。「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」と。すべての人々に私たちはキリストの福音を伝えようとしますが、そのために私たちは出て行かなければいけません。私たちは出て行っているかどうかです。あなたがたが出て行かなければどうして人々はすばらしい福音のメッセージを聞くことができるでしょう?

2) **神のみことばを語った** = 4節にありました。「**散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。**」と。ピリポもサマリヤの町に行ったとき、人々にキリストを宣べ伝えました。12節に「**しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた。**」とあるように、彼らが語っていたメッセージがどういうものか明らかです。彼らは自分の考えではなく神のことばを語ったのです。8:35を見てもピリポはエチオピアの宦官に話をするのですが、「**ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。**」とあり、40節にも「**それからピリポはアソトに現われ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。**」とあります。ですから、このように見て行くと、ピリポは何を語っていたのか、どのようなメッセージを語っていたのかが見えます。彼は神のことを伝えるのです。神のメッセージを伝えたのです。パウロが言うように「**みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。**」(Ⅱテモテ4:3)と、それ以外のものは必要ないと言います。私たちが伝えなければいけないメッセージは神のおことばです。また、パウロはⅡコリント2:17でこのように言います。「**私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売ることとはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。**」と。「**神のことばに混ぜ物をして売ることとは**」しない、神のことばを少し話して後は人間のことを話すとか、人間のことを話している中にほんの少しだけ神のことばを入れるとか、そのようなことはしないのです。彼らは神のことばをそのまま語ったのです。私たちは私たちのメッセージを語るために遣わされているではありません。私たちは神のメッセージを語るために救われ、選ばれ、そして、用いられるのです。ですから、ピリポはそのようにしています。彼のメッセージは神のおことばでした。

3) **神の力で語った** = ピリポはこのような働きを自分の力ではなく神の力によって行ないました。神はこのような迫害をもってみこころをなされました。使徒1:8でイエスが言われたように「**しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。**」と、このことが始まったのです。彼らはこのような方法で散らばって行くということは予期していなかったかもしれませんが、でも、神は迫害を使って彼らをエルサレムから外へ追い出されたのです。そして、ピリポはサマリヤへ出て行きました。エルサレムで始まった伝道がユダヤへサマリヤへと広がって行ったのです。私たちが働きを為すときに覚えなければいけないことがここに記されています。彼らの模範に倣うなら、私たちがすることは「**神のおことばはこのように言っている**」ということ語ればよいのです。それ以外のことはすべきではありません。神の助けをすることなど必要ないのです。私たちは神のことばを正しく語ることです。しかも、神の力によってそのわざを為すことです。私たちがだれかに話をするとき、神さま、どうぞ助けてください、あなたのことばを正しく語れるように、そして、あなたの助けによってこの働きができるようにと、そのように祈りながら私たちは働きをします。あのパウロでさえ、雄弁で最も知恵のあった人ですが、彼はこのように言っています。Ⅰコリント2:4「**そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。**」と、彼は雄弁だったから、彼は知恵があったから、学問があったから、多くの人を救いへと導くことができたのか、彼はとんでもない、神のわざである、「**御霊と御力の現われ**」であると言うのです。だから、パウロ自身も神のおことばを語るときは祈りつつ神の力を求めながら、その働きを為したことを証しているのです。

ですから、宣教において、もちろん、日々の生活においてもそうですが、私たちは常に神の助けを必要とするのです。神に用いられるためには御霊に満たされていることが不可欠です。なぜなら、御霊に満たされている人は、これまで見て来たように、神のみこころに従って行こうとする人、神が命じてい

ることを忠実に行なって行こうとする人、神の助けによってその働きを為して行こうとする人、そういう人物だからです。この8章にはピリポの働きが記されています。6－8節「**群衆はピリポの話聞き、その行なっていたしるしを見て、みなそろって、彼の語ることに耳を傾けた。：7 汚れた霊につかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫んで出て行くし、大ぜいの中風の者や足のきかない者は直ったからである。：8 それでその町に大きな喜びが起こった。**」、そして、その後、9－11節を見ると「**ところが、この町にシモンという人がいた。彼は以前からこの町で魔術を行なって、サマリヤの人々を驚かし、自分は偉大な者だと話していた。：10 小さな者から大きな者に至るまで、あらゆる人々が彼に関心を抱き、「この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ。」**と言っていた。：11 **人々が彼に関心を抱いたのは、長い間、その魔術に驚かされていたからである。**」と、ピリポのことを記している真ん中に、このシモンという人物のことが書かれています。明らかに、ピリポとこのシモンが対比されています。シモンは魔術によって確かに人々を驚かせていました。そして、彼は自分自身のことを自慢しています。「**自分は偉大な者だ**」と。そこで、人々は彼を「**この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ。**」と言ったのです。つまり、シモン自身もそのように主張したし、人々も彼が為す魔力によって、彼には天的な力がある、神の特別な力があるとほめるのです。ピリポも確かに大変な奇蹟を行なっていました。この当時、ある人はこのような働きを行なうことができました。ピリポは病人をいやし、悪霊を追い出しました。そのような奇蹟をピリポが行なうので、人々の関心は次第にシモンからピリポに移って行きました。彼はこのシモンのように自分のことを宣伝も自慢もしていません。すべてのことは神が為しておられることだと、神のことを明らかにするためにピリポはこのような働きを神によって為していたことが分かります。ここで説明しておかなければいけないことがあります。確かに、この時代にあってはこのような奇蹟は必要でした。なぜなら、このような奇蹟、しるしを通して、そのメッセージが神からのものであることを証明することが必要だったからです。同時に、ユダヤ人の使徒たちにも必要でした。なぜなら、彼らがユダヤ人の上に起こった出来事を見ることによって、神は異邦人も同じように救いへと導かれていると知ることが必要だったからです。だから、神はこのような特別な奇蹟をされたし、このようなわざをなす人を置かれたのです。しかし、今私たちはみことばの完成を見たので、そのような奇蹟を見る必要はなくなったのです。神がそのようなことができないというのではないのです。今私たちにはみことばが与えられ、みことばを語るようにと命じられています。そのような働きはもう終わり、働き人もいなくなったのです。疑問が出て来ます。そのような人が今もたくさんいるのではないかと…。私たちは聖書がそのようなことを教えているのかどうかを見なければいけません。このような働きについて記されているのは「使徒の働き」と「コリント人への手紙」だけです。なぜ他に出て来ないのでしょうか？「使徒の働き」は教会がどのように誕生して行ったのかが記されています。コリント書は御霊の賜物について間違った解釈をしていたので、パウロは正しい解釈を教えたのです。もし、今の私たちにも必要であり、今の私たちにも与えられているのであれば、この二つの書以外にどうして出て来ないのでしょうか？今の私たちはこのみことばを語ることによって、聖霊なる神がそのみことばを用いることによって、大きなわざ、奇蹟のわざが為されることを知っています。

このピリポは奇蹟によって人々の関心をシモンから神の方へと向けて行きました。そうすると、シモンは動揺もしたことでしょうが、同時に、彼自身もピリポに関心をもち始めるのです。13節に「**シモン自身も信じて、バプテスマを受け、いつもピリポについていた。そして、しるしとすばらしい奇蹟が行なわれるのを見て、驚いていた。**」とある通りです。補足ですが、このシモンは本当にクリスチャンだったのかどうかです。神学者の中でも意見が分かれるところです。しかし、どのように見ても私はこのシモンが救われていたとは思えません。三つ理由を上げます。(1) 信じたというきっかけが違います＝彼が関心をもったのはピリポが行なっている奇蹟のみわざです。彼自身の罪が示されて、その罪が神に責められて救いを求めてイエス・キリストを信じたものではありません。彼の関心はそのすごいわざでした。(2) 関心が違います＝というのは、18－21節を見ると「**使徒たちが手を置く**と聖霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、：19 **私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい。**」と言った。：20 **ペテロは彼に向かって言った。「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。：21 あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。」**とあるからです。このシモンの関心は何かこのようなすごい奇蹟のわざを自分も行なえるようにということです。マジシャンはみなそうです。いろいろなマジックがなされると人々はすごい！と感心します。種は何か、どのようにやっているのかと思います。そして、出来ることなら自分もやって見たいと思います。このマジシャンに共通していることは、自分ができないことを見ると、自分もしてみたいとなることです。シモンはそれを手に入れるために金を持って来て、金を払うから私もそれができるようにしてほしいと頼みます。彼の関心は違います。霊的なことへの関心などありません。彼はそのような特別な力を自分も得たいと思ったのです。(3) 罪に対する態度が違います＝22節「**だから、この悪事を悔い改めて、主に祈**

りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。」、神がシモンにその罪が赦されるために悔い改めて神に赦していただきなさいと言われるのですが、それに対してシモンは24節「**あなたがたの言われた事が何も私に起こらないように、私のために主に祈ってください。**」と答えています。災いが自分に来ないように祈ってくださいと。ペテロが言ったことは、罪を悔い改めて神に赦していただきなさいということでした。ここにはシモンが悔い改めて主の前に立ち返ったという記事はどこにも記されていません。このようなことを聞くと、もう一度13節のみことばを見たとき「**シモン自身も信じて、バプテスマを受け、**」とありますが、どうも彼の信仰は聖書が教えている信仰とは違うようです。ということは、あなた自身、信じたというならその信仰がどういうものか考えなければいけないし、バプテスマを受けたから私は救われていることに間違いないと、そうも言い切れないのです。バプテスマを受けていても本当に罪が赦されていない人がいる確率が高いのです。バプテスマという儀式が人を救わないということを知っているからです。心から自らの罪を悔い改めて、神が備えてくださった救い主イエス・キリストを受け入れるなら罪は赦されます。赦されたなら、すなわち、救われたなら間違いなくその人の生き方は変わってきます。ヤコブは「**私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。**」（ヤコブ2：14）と言いました。つまり、生き方が変わっていないなら、そのような信仰は神からのものですか？と問うのです。このみことばを引用してJ・マッカーサー師はこのように言っています。「生き方を変えない信仰は救いをもたらす信仰ではない」と。厳しいけれどそれがみことばが言っていることです。本当の救いは私たちの生き方を改めて行きます。私たちが生まれ変わったのなら私たちは新しい願いをもち新しい目標を持ち、新しく歩み始めるのです。そのような変化をもたらさない信仰ならどこかに問題があるのです。

先週の中頃、ある一通の手紙を私の宣教団体だったところからもらいました。その詳細を今お話しすることはできませんが、それはある一人のテロリストのゲリラからの手紙を紹介したものでした。内容はこのようなものです。「貧しさの中、私はより良い生活を求めてゲリラに加わりました。しかし、今そこから抜け出せません。このジャングルの中では聖書を読むこともみことばを聞くことも許されていません。私が悲しいとき、このジャングルの中で生きる希望を失うとき、賛美が私を慰めてくれます。だから、どうぞ放送を止めないでください。神がこれからあなたを御用いてくださるようになります。」この人はこのようにゲリラになってテロリストになって仲間たちと共にある所に潜伏しているのです。彼のリーダーは無神論者で神のことを口にしようものなら殺されてしまう、ところがラジオがありラジオを通してこの番組を聴くようになり、この人は神に立ち返るのです。すごい！と思いませんか？人を殺すテロリストが神のことばによって変えられて行くのです。彼はこう言います。放送を止めないでくださいと言った時、この山の中には神なく失われるたましいがたくさんいるから…と。この後、彼はそこから抜け出して教会に行くようになるのですが、何がこの人に起こったのでしょうか？彼の生き方が変わっています。イエス・キリストを信じることによって彼は自分のことだけでなく、周りにいる人たちもイエスを信じてほしい、だから、放送を止めないでくださいと言っているのです。福音は人を変えます。福音は人を生まれ変わらせます。それだけの力をもっているのです。

このピリポ、彼は聖霊に満たされた人でした。彼は神のおことばを語り、神の力でそのわざを為しました。そして、

4) **神の導きに従っていた**＝彼は常に神の導きに従っていることから、御霊に満たされていた人だということが分かります。26－39節を見るとそのことが分かります。「ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。「**立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。**」（このガザは今、荒れ果てている。）：27 そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、：28 いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。：29 御霊がピリポに「**近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。**」と言われた。：30 そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。：31 すると、その人は、「**導く人がなければ、どうしてわかりましょう。**」と言った。そして馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。」、このようにピリポは神の導きに従って行くのです。30節を見ると、彼の伝道が始まっています。そして、このエチオピア人の高官はイエス・キリストを信じるのです。それは36節から「**道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」**：37 **【本節欠如】**：38 **そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。**」、救われた彼はそのことを公にしたかったのです。なぜなら、彼は一人で旅行をしていたわけではありません。政府の高官ですから従う人はたくさんいたはずで、彼らの前ではっきり証をしているのです。神はこのようにして働かれるのです。皆さんもその通りでしょう。神があな

たの心に働いて、ある人への重荷を与えられたり、いろいろな働きへの重荷をくださる、神はそのようにして私たちをいろいろな働きへと導いてくださるのです。ピリポは確かに御霊に満たされていました。なぜなら、神の導きに従ったからです。神が出て行きなさいと言われたならその通り従いました。ということは、神はあなたを用いようとあなたに働きかけておられるのですが、もしかすると、あなたはそれを無視しているのかもしれませんが。私たちに必要なことは神の導きに対して、分かりました、と言ってそれに従うことです。神は人々に重荷をくださり導いてくださるのです。

5) 家族に対する働きをしている=家族へ伝道をするのです。使徒21:8-9を見ると「翌日そこを立って、カイザリヤに着き、あの七人のひとりである伝道者ピリポの家にはいつて、そこに滞在した。:9 この人には、預言する四人の未婚の娘がいた。」とある通り、ピリポは自分の子どもたちに神のことを伝えています。

ピリポの歩み、彼は神の命令に従って出て行きます。彼は神におことばだけを忠実に語ろうとしました。その働きを彼は神の力によって為そうとしました。そして、彼は神の導きに従い、自分の家族にきちんと神のことを語っています。御霊に満たされた人だったのです。

3. 知恵に満たされた人

評判の良い人、聖霊に満たされた人、それだけではありません。知恵に満たされた人、知恵のある人です。これは、知っていることを実践に適用する能力です。神からの知恵というのは、神を恐れみことばを尊ぶことによって、生活上のすべてのことについて、みこころ、すなわち、何が神に喜ばれるのかを判断し、選択して行くために神が与えてくださる能力です。毎日の生活にあって、どのように生きて神の栄光を現わして行くのか、そのことを教えてくれるのが神から与えられる知恵です。このような生き方をしていたというのは、この教会に集まる人々が、このピリポを見て、まさに彼はこのように生きている人だということを皆が認めたのです。その集まりの中にピリポはいたのです。そして、人々がこのような条件にかなった人がいるかなと見たとき、ピリポがそうだったのです。人々が審査をして、人々が吟味をして、この人がそのような生き方をしていると。まさにこのような生き方をピリポは継続していたのです。だから、彼はこのような霊的な働きに用いられたのです。

12使徒たちはこのような条件にかなう人をあなたがたの中から選びなさいと言いました。そういう人があなたがたの中にいるから、そういう人を選びなさいと。そして、この集まりの中からそのような人物が選ばれていったのです。今、皆さんにチャレンジしなければならないことは、このような霊的リーダーが今私たちの群には必要だということです。今、みことばが私たちに教えてくれたように、その人は評判の良い人です。教会の中にあっても外にあっても、御霊に満たされている人、知恵のある人です。こういう人を教会は必要をしているのです。あなたはそういう人ですか？あなたはそういう人に変えられて行こうと望んでおられますか？ピリポ、すばらしい宣教師でした。キリストの福音を宣べ伝えたすばらしい宣教師でした。そして同時に、彼はすばらしい信仰者でした。神は彼を大いに用いられました。

神があなたに望んでおられることは、どんな働きをするかではありません。どんな信仰者になるかです。どうぞ、神の恵みによって成長してください。どうぞ、私を変えてくださいという強い願いをもって、このピリポがしたように、みことばが教えているように、あなた自身がみことばに従ってください。主よ、どうぞ私を変えてください、私をあなたのみ栄えのために用いてくださいと…。